



ふじ丸のラストクルーズ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀江, 珠喜 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15368

ふじ丸のラストクルーズ

大阪府立大学教授 堀江珠喜

ふじ丸は2013年6月19日、「ふるさと」である神戸港に別れを告げた。あいにくの曇天ではあったが中突堤には停泊中だった広島商船高等専門学校「広島丸」の生徒達、ファン達が見送りに集まり午前9時、ふじ丸は岸壁を離れた。(私もその中に混じったのだが、意外にもそこではふじ丸の乗船経験者には出会わなかった。このような、いわば客船追っかけ組もクルーズの経済効果として寄港地は「観光」産業に取り込むべきではないかと考える。)この日、ふじ丸には乗客はおらず、キッチンスタッフをはじめ手隙の乗員が右舷側に並び、我々に手を振り続けてくれた。それまで私はふじ丸には一回(2010年8月17日~19日の熊野大花火と名古屋・東京クルーズ)しか乗ったことはなかった。キャビンはお世辞にも豪華とは言えないが、パブリックスペースの内装はオーソドックスで品がよく、日本船としては好感の持てる一隻であったので引退を残念に思い、神戸港での最後の姿を見に行っただのである。いっぽう田中博は、見送りの遊覧船招待の抽選に外れたので、同目的の為に運行される有料(千円)遊覧船に乗ってふじ丸を近くで撮影し続けた。結果的に混み合った招待船に比べ、有料のほうは空いていたので船上で自由に動け、写真も撮りやすかったようだ。(私は岸から離れて行くふじ丸を写せたので、共同作戦成功というべきか?)



Pic. 1 2013年6月19日 神戸港を離岸する ふじ丸



Pic. 2 広島丸の生徒達

さて、ふじ丸のラストクルーズは6月30日~7月1日の東京(晴海)~初島往復である。それに気がついたのはなんとも遅い6月17日であった。郵船トラベルのホームページによれば当然ながら満室とあったが、その横に「お問い合わせください」と記載されていたので電話してみた。すると一室(604号室)だけ空いているとのことで、早速予約した。これほど間近になっても参加できる国内旅行は有り難い。(乗船後、さまざまな方にラストクルーズの予約時期を聞いたところ、大部分は4月の売り出し直後で、少し遅れた方はウェイトリングリストに記載され3週間ほどしてやっと5月中旬に部屋が取れたということであった。というのもラストクルーズは、定員の600人ではなく300人をめどに募集されたし、最後ということで思い入れのある方が多く、調整が大変だったようなのだ。察するに私の部屋は予備に後までわざと残されていたのかもしれない。)このようにラッキーな機会が得られたので、本誌にふじ丸ラストクルーズ報告をさせていただきたい。

《6月30日入港・出港》

この日のふじ丸入港予定は午前11時であったが10時前からカメラを携えたファン達は良い写真の撮れそうな場所で待機していた。十時半頃ふじ丸は姿を現し、予定通りに着岸した。



Fig. 3 2013年6月30日 東京港晴海埠頭に入港

ターミナルではふじ丸の写真展も小規模ながら開かれ、この船の模型も飾られていた。乗船受付は5時だが、ラストクルーズ客のなかにも田中博や私のように入港を見るため早めに来た方が何人もいらした。そのなかで乗船までの間、銀座にでも行って時間を潰すという方がバスの一日乗り放題券を見せてくださった。せっかくの船好きがターミナルで楽しめる設備も荷物預かり所も無いのは残念である。我々は読書や iPad で音楽を聴いたり昼寝や、神戸港の先述の見送りで親しくなった方と再会しておしゃべりをするなどしてターミナルにとどまった。(空港のトランジットなどで長時間待つのは慣れているためか、それほど苦痛ではない。) 午後4時になると、焼酎、飴、Tシャツ、ポロシャツなどのふじ丸クルーズ・グッズがターミナル特設会場で販売された。このころになると乗船予定客や見送りのふじ丸ファン達でターミナルは混雑してきた。

午後5時に東京都から限定500枚の「ありがとう ふじ丸 2013.6.30～7.1 ラストクルーズ 東京出港記念」と記されたふじ丸の絵葉書が配られた。(客室内にはこれと同じ絵葉書とともに神戸市から寄贈された「ふじ丸進水記念 昭和63



Fig. 4 記念の絵葉書

年9月10日」のふじ丸の絵葉書と富士山の絵葉書の復刻版が我々への土産として置かれていた——富士山が世界遺産に認定された直後のふじ丸の引退は、複雑な気持ちにさせられる。なお東京都からの葉書には通し番号がつけられ千枚刷られたことがわかる。)

5時に受付が始まった。さすがに主催したゆたか倶楽部のカウンターに並ぶ客が群を抜いて多かったが、数社の協力代理店には三越トラベルや日経カルチャーもあった。郵船トラベルのカウンターで私が名前を言うと「ああ、最後の一部屋の方ですね」と言われた。最後の部屋をどこの代理店に渡すかが密かな話題になったのかもしれない。(船内で事情通の乗客から聞いた話だが、神戸港に別れを告げるふじ丸のニュースを見てからラストクルーズの問い合わせが100件ほどあったとか。)

国内クルーズなのでパスポートチェックも当然ないし、キューナードなどでは必ず書かされる体調自己申告書もなく、クレジットカード登録がなかったので乗船手続きはとても速く終わり、持ち物のセキュリティチェックもなく、フィリピン人乗員が大きな荷物を途中までは運んでくれ、予定通り5時半には避難訓練ができたのは驚きであった。

ふじ丸は、どの部屋もバルコニーがないしモノクラスなので、今回は最も安い部屋にした。とはいえもともと4人部屋として作られているので他船の最低価格部屋より大きい。1、2泊ならシャワーで充分だし、近くに大浴場もある。それに、いずれにしろ花火は後方のデッキから見物するので部屋は寝るための場所だった。しかしこのラストクルーズではスーパーAしか残っていなかったので、バスタブなしには違いないが、ツインベッドとソファ（3名だとベッドになる）でゆったりし、窓も大きい。収納スペースもよく考えられて無駄がない。そして向かいのキャビンとの間の廊下の幅が1.5mあるのも贅沢な気分してくれる。前方のレスト・スポットにも出やすいので、バルコニーが無くても不自由を感じない。



Pic. 5 スーペリアBの室内



Pic. 6 6階の幅広い廊下

出航に際し、「ありがとう！ ふじ丸」セレモニーが東京都港湾局によって停泊前の客船ターミナルで催され、我々は船の4階プロムナードデッキでカクテルをいただきながら見た。船長が花束を受け取り挨拶し、国学院大学の吹奏がラストクルーズの出発を華やかに盛り上げてくれた。またターミナル側では多くの人々が手を振って見送ってくださった。「ありがとうふじ丸」や「ふじ丸引退反対」の文字も掲げられた。(ただし東京でも翌朝の新聞にこの光景が紹介されはしなかった。各紙、ラストはラストでも松坂屋銀座店の閉店を報じることのほうが、よっぽど大事だったのだ。)

午後6時過ぎに出港した船はゆっくりと東京湾を航海する。高層ビルが建ち並ぶ東京を海上から眺めると心が躍る。これまで東京湾の遊覧船や屋形船に乗ったことはあるが、やはりふじ丸の4階という高所からの景色は素晴らしい。



Pic. 7 出港セレモニー



Pic. 8 ふじ丸引退反対



Pic. 9 見送りの人々



Pic. 10 ふじ丸の船員たち

《ディナーと夜のイベント》

このように出港後、しばらく甲板で東京を離れる様子を楽しんでいたのですが、6時半から7時に予定されていたオリエンテーションとツアー説明会には出ず、7時からの夕食のために部屋へ戻って着替えた。ドレスコードはカジュアルではあるが、事前に送られて来た「クルーズのしおり」には目安として「あくまでも『よそ行き』で普段着ではありません...女性は、日常なかなかなか着ないような派手な色使いや大胆なデザインのシャツやセーターも良いでしょう」とあったので、キュナードのエlegantカジュアル・ナイトで着るカクテルドレスを選んだ。田中はラルフローレンの紺ブレにグレーのズボン、そして私のドレスの色に合わせてピンクのネクタイをしめた。(キュナードではカップルがこのような色合わせでおしゃれを楽しんでいるのを、よく見かける。)



Pic. 11 ディナータイム

ラストクルーズでは、すでに乗員数を減らしているのに乗客も300人にしたと聞いたが、その良心的配慮のおかげで、食事は一回制にもかかわらず「スタッフ不足でサービス低下」は全く感じられなかった。(キュナードのスタッフ減らしによるレストランの変化のため半年前に幻滅した我々も、このふじ丸ラストクルーズの食事サービスには、満足した。) 席は指定ではなく、行った順番で奥のテーブルに案内される。相席の4人テーブルで、我々より年配の上品なご夫婦がすでに食事を始めていらした。

この晩のメニューは洋食で、オードブルは「マグロのたたきと3色のミニトマト」、スープは「びっくり茸のパイ包みコンソメ」、魚料理は「真鯛と

焼き茄子のシャンパン蒸し、サフラン・ソース イクラ添え」、口直しに「ハイビスカスのグラニテ」、肉料理は「テンダーロイン・ビーフのシャリアピン・ステーキ フォアグラ添え」。これにサラダとパン&バターが付き、デザートは「赤身メロンとフロマージュ・ブラン バニラ・アイスクリーム添え」で、コーヒーか紅茶で終わる。料理はすべて美味しかったが、特にアイスクリームは濃厚で、フォアグラもキュナードに比べてはるかに「まともな」状態で出された。(キュナードは食中毒を心配して加熱し過ぎ、食材を台無しにする傾向がある。) このディナーではハウスワインやビール、オレンジジュースとウーロン茶は追加料金なしで提供された。白ワインはソアヴェでふじ丸のラベルが貼ってあるボトルだったので、ウェーターに頼んで空になったのをもらった。(夜中に部屋でラベルを剥がして記念に持ち帰った。)

このせつかくの美味しいディナーを、残念ながらゆっくり味わうことはできなかった。次なる大事なイベント(我々がこのクルーズで楽しみにしていた4大イベントの一つ)が8時45分から10時、そして10時15分から11時半までメインホールで開催されるため、早い目に行って最前列の中央席を取りたかったのだ。まず前半は造船に深く関わられた三菱重工株式会社 元船舶・海洋設計部長 小林幹弘氏による講演「ふじ丸誕生を振り返って」である。内容については本学会員である小林氏が学会誌などにお書きになることを期待するとして、私が感心したのは昨今講演という必需品のように思われがちなパワーポイントを一切使われず、おかげで、いただいた資料が見やすくメモもとりやすく、なにより講師自身の人間的魅力が発揮されたことである。またクルーズのイベントは45分~1時間で終えるという原則をわきまえておいでで、約1時間で尽きないであろう話をまとめられたのはさすがであった。

第二部のようなかたちで10時15分から催されたのは、座談会トークショー「ふじ丸の思い出と日本の客船文化」で元ふじ丸 船長 澤山恵一氏、元ふじ丸 チーフパーサー 佐藤利男氏、元ふじ丸 総料理長 谷内尚武氏、元商船三井客船株式

会社 常務取締役 渋沢忠氏の4名が登場し、女性司会者が彼等の話を仕切るという形式であった。それぞれ立場が異なるので4名の話はばらばらでまとまるはずがない。その司会が難しいのはわかるが、発言者の内容をちゃんと聞かずに質問しているような、まどろっこしいやり取りに、悪いが私は何度も時計を見た。



Pic. 12 座談会

本当にこんなにだらだらして11時半に終わってくれるのだろうか? というのも2つ目の我々のクルーズ目的であるダンスタイムが12時で終わってしまうのだ。せめて30分くらいは踊りたい。予定通り座談会が終わらなくても11時半にはそこを出るつもりであった。(夜食目的の方も心配されたのではあるまいか? 夜食は11時45分までと案内されていたのだから。やはりクルーズのイベントは1時間以内、それより長くなるときには、時間を分けて行って欲しい。一人ずつのインタビューでも聞き手が巧ければ45分くらいのイベントが4回できるだろうに、惜しいことだ。今回は谷内氏のコメントを最も愉快に拝聴した——「クルーズの食事は押し付けです。陸と違って、他に食べに行くところがありませんから」とか。まさにそうなのだ。)

話が尽きたのか、最前列中央の我々夫婦がこれみよがしに時間を気にしたせいも、無事11時半でこのイベントが終わったので、我々は3階のラウンジ「エメラルド」へ直行。ここでは飲み物の販売はなく飲料水のセルフサービスがあった。10人余りが集い、踊っているのは3組くらい。音楽はCDだが選曲ミスさえしなければ生演奏よ

りも踊りやすいことも多い。ここのフロアは船の大きさや乗客数のわりに広くて踊りやすい。またここは他の催し物、アフタヌーンティにも使われるので、客席数も300名分くらいは充分ありそうだ。(翌日計ったところ、フロアは8m強×7m弱。洋上で最も広いダンスフロアはQM2の13.5m×9m弱だが、QM2の定員は2600人、ふじ丸は600人なので乗客1名あたりのダンスフロア面積はふじ丸の方がはるかに大きいことになる。)ダンスの後、カジノに寄り、部屋に配られていた「カジノ銀行券」4千ドル分をまたたくまにルーレットですってしまふ。翌日のスケジュール表が配られたのは12時半頃であった。つまりそれまで朝食時間を知らせていなかったのである。

《二日目》

朝食は7時から。和洋食あり、ブッフェスタイルの相席である。船上でこれほど熱いコーヒーが出るのは珍しい。野菜スープや豆腐ステーキなどもあり美味しい食事だったが早い目に初島に渡りたかったので、またもや急いでいただく。ただし我々の3つめの目的についての情報は偶然ながら同テーブルの同目的客から聞くことができた。これについては後述する。初島へはテンドーボートを利用するのだが、ふじ丸からまずポンツーンに降り、そこから乗船した。これまでポンツーンを使ったクルーズを体験したことがなく、物珍しく面白かった。初島上陸の目的はそこからふじ丸を撮影することであったから、観光はせず、写真を存分に撮ると船に戻った。ラウンジで少しダンスをした後、出港準備のポンツーン切り離しやテンドーボート引き上げを見学した。



Pic. 13 ポンツーンとテンドーボート



Pic. 14 初島から見る ふじ丸

ランチは 12 時半から 1 時半。なんと洋食フルコースである。野菜のクリームスープ、サーモンのグリル、仔羊の香草焼き、ミモザサラダ、パン&バター、ブラン・マンジェにコーヒークリームで、どれも美味しかったのだが、またもや次なるイベントのため、大急ぎで食することとなった。

1 時半からふじ丸ラストクルーズ・オークション。ふじ丸関連グッズの販売である。非売品を手に入れるまたない機会である。これについては乗船前の「しおり」の隅に小さく記されていたが、何が出るかの情報は無かった。そこで我々は欲しいものを想定し、落札希望上限金額のキャッシュを用意していた。朝食時に同テーブルだった男性客は、このクルーズの目的はこのオークションだけと明言していた。戦前の日本郵船の食器もお持ちのコレクターである。6 桁から 7 桁のキャッシュを持参していらっしゃるようであった。この方いわく「ゆたか倶楽部も誰もオークションの仕方を知らねえんだよ。俺が教えてやるっていうのにさあ」と嘆き不安がっておられた。

まさにその不安は的中。我々はキューナードのスムーズなオークションを経験しているせい、よけいに女性司会者と男性担当者の不手際に腹立たしさを覚えることになった。あまりに時間の無駄使いをするので、出品させたものすべてを売る時間がなくなったほどである。近いうちにクルーズ船での食器について調査をまとめたと考えているので、私は予定通りディナー用の商船三井の皿と大阪商船三井時代の食器を入手した。宅配便受

付のコーナーが設けられているのは、さすがに国内クルーズである。



Pic. 15 オークション第1部

売る時間のなかったものは第二部にまわすということで、6 階で集合写真タイム、それに続いてアフタヌーンティの時間となった。しかしお茶は後回しにして、我々は 4 つめの目的である貴賓室「花車」の特別公開へ急いだ。これはラストクルーズの「しおり」でも知らされていたのだが、船内で配布されたスケジュール表では触れられておらず、朝、インフォメーションデスクで問い合わせたところ「皆様が戻られたらご案内します」とのことであったが船内放送もなく、ランチ直後に再び尋ねに行くと「2 時半から 4 時半」と言われた。ところがオークションの後ろの席の方は 12 時半から 2 時との情報を得ていた。そこで再度、田中が開きに行くと「2 時半から 4 時」と案内がまた異なっていた。

場所は図書室の反対側だとわかっていたし、ドアは開けられ、入って写真撮影も許された。応接室になっていて龍村美術織物製の花車のタペストリーが壁に飾られている。隣室のサロン「桜」のタペストリーはやはり龍村製で桜が描かれているので品良く調和がとれている。ただし龍村製でも超高級品ならこんなふうにはわざわざ「龍村製」とは織り込まれないのだそうだ。カーペットはオリジナルと思われるが、椅子は高級とまでは言えない布に張り替えられている。カーテンに至っては、ぺらぺらのお手頃価格のもので貴賓室にふさわしいとは思えなかった。それでも「開かずの間」と呼ばれ、この日以外は立ち入りができなかったと

いう点に我々は魅せられてしまう。この部屋のドアの前には説明書きが掲示されていたが、我々のように積極的に情報を得るか、偶然に前をこの時間帯に通らないとせっかくの機会を逃してしまう。狭い部屋に皆が詰めかけないように、わざと案内を控えたのかもしれない。



Pic. 16 花車のタペストリー



Pic. 17 貴賓室 花車の内部

4 時からは第二部のオークションで「東日本大震災復興支援オークション」となった。ふじ丸の入港盾や、船長の帽子やチャート、ゆたか倶楽部がふじ丸をチャーターして訪れた 64 の港に商品提供を依頼して 25 港から送られて来た商品などが並び、売り上げはすべて石巻市に寄付することであった。(では第一部の売り上げはどうするのだろうか？ 司会者は何の説明もしなかった。乗務員の送別会に使われるなら別にかまわないのだが？)



Pic. 18 オークション第2部

女性司会者は自分のジャケットは着替えても品物の事前チェックをする時間(気?)は無かったらしく、もっと多くの品を売れたはずなのに、戸惑い間違い、時間を無駄遣いしてのオークションであった。朝食時のくだんのコレクターは、彼流の方法で欲しいものを買っていた。朝、我々に語ったように、競り上げずにいきなり高額を提示して相手をあきらめさせるのである。「12、3万で競っているときに 30 万と叫べば落ちるよ」というわけだ。それも一理ある。キューナードで 1200 ドルと私が言うに 1300 ではなく 1500 と言われ、私は降りたことがある。しかしあれは私がたいして欲しかった品ではなかったからで、すでに狙っていた品は私なりの予定額(2000 ドル)の一割強の値段で落札していた。もし「本命」なら 3000 ドルまでは出しただろうが。そう、予想をはるかに下回る落札価格もあるのだ。ポイントは、どのくらい自分がそれを欲しいか、である。しかしふじ丸オークションで、この方は 3 千円まで競り上がった品に、1 万円を付け入手していた。(あれなら、せいぜい 5 千円で買えたのでは？と私は思ったが。)

寄港地の盾には誰も欲しがらないものもあるし、江田島(司会者は「エタシマ」と読んでいた。20 年間ふじ丸で働いていたということだが、レベルが低すぎないだろうか?)のは 2 万円を越えた。結局すべてを売り切らないうちに時間切れとなり、売り上げの 18 万円強にゆたか倶楽部が端数を足して 20 万円にし、松浦社長から石巻市の市役所職員に贈呈された。商品提供各港には購入者の名前、住所、金額と写真が送られるということであ

った。しかし希望者のいなかった商品はどうするのだろう？また時間切れで買えなかったという苦情も一部の熱心なファンから寄せられ、オークションはこの直後に予定されていたビンゴ大会などの終了後に再開されることになったようだ。しかしそれでは夕食が始まってしまう。我々の欲しいものはもうないから関係ないが、これが最後のチャンスと思い、このためだけに乗船したコレクターにとっては真剣勝負である。全く困った司会者とイベントディレクターだ。

〈夕食と入港〉

夕食は6時半から。「しおり」によれば2日めの晩は「軽食」とあったのでサンドイッチくらいを想像していたのだが、船内で配られたスケジュール表には和食となっていた。やはりふじ丸最後の食事が軽食では、それこそ「後味が悪い」ということで変更してくれたのだろうか？別会社とはいえ料理に定評のある商船三井の名誉にかけてもお粗末な印象を与え、そのあおりでにつぼ丸の評判が落ちては困るから？前菜は鴨ローストと蓴菜、ただ茶豆、吸い物は蜆の赤出し、造りは縞鰯と甘海老、煮物は銀だらの煮付け、焼き物は沖縄アグー豚の榎茸巻き焼、茶碗蒸し、青柳と分葱の辛子酢味噌和え、加菜ご飯、香の物、キウィ・フルーツと和菓子。もちろん日本茶は付くが、その他のドリンクは別料金となる。どれも美味しかったのだが、ゆっくり味わう時間が無く、急いで食べ終えるべくアルコールは注文しなかった。

部屋に帰ると荷物を大急ぎでまとめ、6階の船首側デッキで入港を楽しんだ。この高さから徐々に東京の夜景に近づくのは、なんと豪華な体験であることか。一階上が操舵室であるのもなんだか嬉しい。イルミネーションの美しいレインボーブリッジを通過すると、東京消防庁、消防艇による歓迎放水がよく見え、船はゆっくりと晴海客船ターミナルに着いた。予定通り午後8時である。

夕食前に到着時に出迎えの方々に振ってくれとペンライトを渡されたのだが、船首部分では光を発するものは操舵の妨げとなり危険なので禁止のはずだ。キューナードではカメラのフラッシュも叱

られ、船首付近が立ち入り禁止になることもあるほどだ。なのに、なんの注意も無くペンライトを配っていいものか？いや、客達が使いだすと、船首付近では使うなどの放送がなされた。やっぱり！



Fig. 19 入港歓迎放水

ターミナルには多いとはいえないが、やはりふじ丸、客船ファン達から「お帰りなさい」の声。下船は6階（つまりこの船で高い価格の部屋がある階）の客から、ついで5階、4階の乗客の順番ということだった。船がまだ入港しつつあるときからルームキーを2階デスクに返せというアナウンスがうるさかったので、着岸すると早めに荷物を持って降り、下船の準備が整うのを待つことにした。すると6階のエレベーター前に日本人スタッフがいて、「下船の用意ができるまでお待ちください」と乗せまいとする。「だって、さっきから鍵を返せとアナウンスがうるさいから持って行くのよ」と私は言い、別の客は「早く降りないと、5階や4階の人たちが順番を守らないでエレベーターを使って、我々が降りられなくなるのよ！」と叫ばれた。その迫力にスタッフが負け、ようやくエレベーターに乗ったのだが、案の定、5階や4階からも荷物を持った客達が乗り込んで来た。

スタッフは6階にではなく、5階と4階のエレベーター前に立ってその階の客を足止めし、優先下船を予定通りにさせるべきだったのだ。（優先下船どころか我勝ち下船となった。キューナードでは、その点、荷物札の色により下船順番を守らされる。定員が少ないと、我勝ちでも混乱もたいしたことはない）ので、ふじ丸では最後までこのようにナン

センスな誘導を伝統にしてきたのかもしれない。

下船時には、船長の見送りを受け、フィリピン人乗務員が大きな荷物をターミナルまで運んでくれた。今回は東京都港湾局の厚意でターミナルから勝どき駅、銀座四丁目、東京駅（八重洲口）まで無料のシャトルが運行され、大変助かった。

〈最後に〉

私はいつも（ドレスコードやイベントなどの）テーマを決めて本学会に寄稿してきた。このように一回のクルーズについてあれこれと書くのは、本来、私のやり方ではない。だが今回は一泊二日、時間にすれば 26 時間のクルーズであり、なにより日本の船舶史に残るふじ丸の最後のクルーズということで、「記録」として残すのが乗る機会に恵まれた者の義務であろうと考えた。もちろんクルーズの楽しみ方は人それぞれであり、同時開催されたイベントについては報告できなかった。しかしラストクルーズらしい催し物については、参加できたと考える。このあとのふじ丸の運命だが、例のオークション目的おじさん（田中博と私は 30 万円オジサンというアダ名を密かにつけた）によれば、買い手は見つからず、いずれはバングラデシュで解体されるだろうとの悲観的な話であった。ならばこそ、我々はこの船の記録を残さねばなるまい。今回この船で話しかけることのできた乗客の何組もが、「ふじ丸が私たちのクルーズの最初の船だったので、今回は是非乗りたかった」と言われた。そう、ふじ丸が楽しいクルーズを提供してくれたからこそ、船旅の魅力にとりつかれた日本人がきっと多いのだ。ふじ丸の功績がどれほど大きいのか、その認識を新たにするためにも、今後は他船で日本人客にふじ丸経験を尋ね続けようと思う。きっとふじ丸でクルーズ・デビューした何人もの方に会えるに違いない。



Pic. 20 記念の焼酎



Pic. 21 ラスト・クルーズ乗船記念品